

東京都スポーツ振興審議会（第22期）

第1回

平成19年10月30日（火）

東京都生活文化スポーツ局スポーツ振興部スポーツ振興課

第22期 東京都スポーツ振興審議会委員名簿

市川 正	(財)東京都体育協会副会長
岡野 俊一郎	I O C 委員、J O C 理事、東京オリンピック招致委員会理事
笠原 一也	国立スポーツ科学センター長
金子 正子	(財)日本水泳連盟理事
金 哲彦	N P O 法人ニッポンランナーズ理事長
河野 一郎	J O C 理事、東京オリンピック招致委員会事務総長
小林 至	江戸川大学教授、福岡ソフトバンクホークス(株)取締役
杉山 茂	スポーツプロデューサー
古谷 隆昭	読売新聞東京本社スポーツ事業部部長
丸山 正	(財)日本レクリエーション協会理事
山崎 浩子	(財)日本体操協会理事、(社)日本新体操連盟理事
山崎 泰広	日本身体障害者社会人協会会長
山田 忠昭	東京都議会議員
小沢 昌也	東京都議会議員
木内 良明	東京都議会議員
武井 雅昭	特別区長会（港区長）
稲葉 孝彦	東京都市長会（小金井市長）
河村 文夫	東京都町村会（奥多摩町長）
中川 恵	東京都高等学校体育連盟会長（都立桐ヶ丘高等学校長）
木内 秀樹	東京私立中学高等学校協会広報部長（東京成徳大学中学・高等学校長）

第一回東京都スポーツ振興審議会（第22期）

平成19年10月30日（火）
午後2時30分から4時30分まで
都庁第一本庁舎7階 大会議室

- 次 第 -

- 1 開 会
- 2 会長及び副会長互選
- 3 委員紹介
- 4 知事あいさつ
- 5 議 事
 - (1) スポーツ振興基本計画の策定に向けて
 - (2) その他
- 6 閉 会

午後 2 時30分開会

細井スポーツ振興部長 定刻でございますので始めさせていただきますと思います。

ただいまより、第22期第 1 回東京都スポーツ振興審議会を開催させていただきます。

本日は、お忙しいところをご出席いただきまして、ありがとうございます。

私は、生活文化スポーツ局スポーツ振興部長の細井でございます。後ほど皆様方に会長・副会長をお選びいただくまで、私が進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

恐縮ですが、座って進めさせていただきます。

委員の皆様のご委嘱状ですけれども、本来であればお一人ずつお渡しするべきものですが、時間の関係上、席上に置かせていただきましたのでよろしくお願ひいたします。

本審議会の委員総数は20名ですが、本日は17名の委員の皆様にご出席をいただいておりますので、審議会開催に必要な定足数である過半数に達しておりますことをご報告申し上げます。

本日もご出席いただきました委員の皆様の名簿につきましては、席上に配付させていただいておりますので、ご参照いただきたいと思います。後ほど知事が参加してからご紹介をさせていただきます。

なお、本審議会は公開で行っております。報道機関及び傍聴の皆様には、会議の円滑な進行にご協力をお願ひいたします。

それでは、早速ですけれども、会長・副会長の選任に移らせていただきます。会長・副会長につきましては、委員の皆様で互選していただくことになっておりまして、ご意見を頂戴したいと存じますのでよろしくお願ひいたします。

市川委員 会長さんには、ぜひ杉山先生に、そして、副会長には河野委員さんにお願ひできたらと思います。ご賛同をお願ひしたいと思います。

(「異議なし」の声あり)(拍手)

細井スポーツ振興部長 「異議なし」のお声がありましたので、会長には杉山委員、副会長には河野委員にお願ひしたいと思います。

それでは、杉山会長に進行役をお願ひいたします。よろしくお願ひいたします。

杉山会長 杉山でございます。お顔ぶれを拝見いたしますと、どなたがチェアパーソンのポストにお就きになっても、それぞれふさわしい方ばかりでございますが、どうやら、名簿を見ますと、年長組ということで私がお指名いただいたのではないかと思います。

私も、今日いただきました委嘱状を拝見いたしますと、任期の最後のところで、東京が立候補しておりますオリンピックの2016年の開催地が決まるということでございます。どうか皆様方の活発なご意見で、最後のこの委員会も祝杯で終わりたいと思っておりますので、よろしくご協力をお願いいたします。ありがとうございます。（拍手）

河野さん、どうぞ。

河野副会長 河野でございます。ご指名いただきましてありがとうございます。

今、杉山会長からお話がありましたように、2016年に向けて、えいやっとやっているところですが、皆様方のご協力、ご支援を得て、祝杯を上げるところに期待しております。ぜひよろしくをお願いいたします。（拍手）

杉山会長 それでは、ご多忙の中、第1回ということでわざわざ時間を割いていただきまして石原知事にご出席をいただきました。

先ほどもご案内がありましたように、事務局から委員をご紹介いただければと思います。よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 それでは、委員の皆様をご紹介させていただきます。お席の順にお名前を読み上げさせていただきますので、よろしくをお願いいたします。

一番奥のほうからでございます。

木内秀樹委員でございます。

木内（秀）委員 よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 丸山正委員でございます。

丸山委員 よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 古谷隆昭委員でございます。

古谷委員 古谷でございます。よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 小林至委員でございます。

小林委員 よろしくお願ひします。

細井スポーツ振興部長 金子正子委員でございます。

金子委員 よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 山崎浩子委員でございます。

山崎（浩）委員 よろしくをお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 金哲彦委員でございます。

金委員 よろしくお願ひします。

細井スポーツ振興部長 市川正委員でございます。

市川委員 よろしく申し上げます。

細井スポーツ振興部長 山崎泰広委員でございます。

山崎(泰)委員 よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 また奥のほうに戻りまして、小沢昌也委員でございます。

小沢委員 よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 山田忠昭委員でございます。

山田委員 山田です。どうぞよろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 木内良明委員でございます。

木内(良)委員 よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 杉山茂会長でございます。

杉山会長 杉山でございます。

細井スポーツ振興部長 河野一郎副会長でございます。

河野副会長 河野です。

細井スポーツ振興部長 稲葉孝彦委員でございます。

稲葉委員 稲葉でございます。よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 武井雅昭委員でございます。

武井委員 よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 中川恵委員でございます。

中川委員 中川です。よろしくお願いいいたします。

細井スポーツ振興部長 なお、笠原一也委員、河村文夫委員につきましては、本日はご欠席のご連絡をいただいております。また、岡野俊一郎委員につきましては、F I F A 国際サッカー連盟の会議の帰国が遅れ、本日は急遽欠席となりました。

委員の紹介は以上でございます。

なお、本日は、生活文化スポーツ局長の渡辺日佐夫が出席しております。よろしくお願いいいたします。

杉山会長 改めて、委員の皆様、どうぞよろしくお願いいいたします。

それでは、お忙しい中をご出席いただきました石原知事からご挨拶を賜りたいと思っております。よろしくお願いいいたします。

石原知事 皆さん、お忙しいところ、この委員をお引き受けいただきましてありがとう

ございました。

お聞き及びでしょうけれども、東京は2016年のオリンピックに名乗りを上げ、何とか日本のコンペには勝ちましたが、これから先、指名を受けるべく努力を多々しなければなりませんし、また色々情報を取りますと、ロゲさんが会長になってからだいぶ変わったとはいいながら、私から見ると魑魅魍魎の世界だね。それで、石原さん、よくオリンピックに名乗りを上げたなと言う人までいましてね。これは歌の文句じゃないけど、そはI O Cに出かける限りは勝たねばならぬで、皆さんのお知恵を色々お借りしたいことと、何もオリンピックの招へいのためのテコだけではなく、日本の今の社会の色々な物事を眺めると、スポーツという非常に有効な手立てを以って、若い人たちにもう少し変質し健全に育ててもらいたいと思わざるを得ない現況です。

この間、ロゲ会長が来たときに会食しまして、色々な話をしました。あの人もずっとヨットの選手で、私もヨットを長らく、外洋を走る大きなヨットの会長をしていましたが、私の代になってから、私自身も選手として出ていましたし、小笠原と沖縄からの非常に怖い激しいレースを作って、最初は盛況でしたが、このごろは全然エントリーがない。3年ほど前に、4杯ほど出るというので、これはいいなと。おれも出ようということで船を整備していましたが、全艇キャンセルしたと。要するに、石原さんが一人が出るわけにはいかないでしょうと。どうしてみんなキャンセルしたのかと。乗り手がいないと。やろうと集めてみたら、一番タフなフォアデッキマンは60代の人間しか集まらないというので、それではとても危ないからというのでやめました。

その話をロゲにしましたら、それはヨーロッパでも同じですよと。どうしてこんなことになったのかと言ったら、自分もレースに出て、結局、ペイで来るプロを雇わざるを得ない。どうしてこんなことになったのかというと、彼は、3つのスクリーンのせいだと言う。その3つのスクリーンは何かというと、テレビ、インターネット、携帯だと。携帯は、ヨーロッパでそんなに普及していないはずだけど、それでも携帯と言いましたね。携帯の中でもろくな情報がないんでしょう。ということで、お互いに慨嘆し合ったのですが。

しかし、それで済むことはありませんし、これからの社会を担っていく若い世代に、もうちょっと気骨と言うと偉そうに聞こえるけど、持つべきものを備えて、人間としてたくましく進んでもらいたいと思うのですが。

この間も、あるメディアで、松平さんという、日本のバレーボールを率いてミュンヘンでは金を取り、銀も銅も取った彼と話しました。これは他の名前は出さないけど、私は、

北区の、国が作ったトップアスリートのための素晴らしい施設に行きまして、あんなものを関西と九州にもう一つ作れと言ったのですが、とてもそんなお金はないと言っていましたけれども。

たまたま、ある女子のナショナルチームの座学をやっていました。言ってもいいでしょう。バレーですよ。

私が大松監督のことを褒めたというけど、懐かしく思ったら、柳本さんが追いかけてきて、石原さん、昔みたいにかかないんです。今の選手は怒ると、すねたり、泣いたり、やめると言う。なかなか昔みたいにかかないです、と言うから、僕は、そうですか、なるほどねと言ったけど、不満だった。私はその話を松平さんにしましたら、松平さんは言下に、それは間違っていると。柳本はいかんと。選手に愛されようと思った監督なんて、チームは絶対に強くない。やめるならやめろと突き放したらいいんだと。

親もそうだと。子どもに愛される親なんかになってはいけない。私は、16のときに失明したお母さんに育てられて、とにかく、失明して全盲だけに、より厳しかったけど、今はそのことで覚えているのは、とにかく親が子どもに厳しくなくて、子どもに愛されようなんて、そんなことを考えてしつけができるわけがない。スポーツの監督もそうだとはいいましたが、なるほど、そのとおりだなと。私はあのときに感じた不満というのはそういうことかなと思ったけど。松平さんは、柳本さんにも同じことを既に言ったそうですよ。

そういう時代ですから、よほどの策を講じて、まず子どもたちを引っ張っていかないと、スポーツの振興も、家でテレビを見ていれればいいや、家でスポーツゲームのテレビゲームをしているほうが楽しいみたいなことになれば、肉体はどんどん衰弱して行って、国家そのものが衰弱していくのではないかという気がいたします。

一つそういう点で、皆さんにいろいろ策を講じていただき、ご意見を出していただいて、東京にできることだったら、東京だけのためではなく、日本全体のために一つのムーブメントも、オリンピックのためだけではなくて、東京から進めていきたいと思います。よろしく闊達な意見をお出しいただいて、少し東京も刺激してください。よろしくお願いします。

ありがとうございました。（拍手）

杉山会長 ありがとうございました。いきなり日本のスポーツ界の、あるいは、世界のスポーツ界の魑魅魍魎の話が出ました。

石原知事 日本じゃなくて、世界の魑魅魍魎。

杉山会長 日本もあやしいものだろうと思いますが。

そういうところで、極めて鋭いご意見や、ジャーナリスティックな目をお持ちの方が中心になってこのメンバーが作られていると思います。また、知事が最後におっしゃいました、ファイティングスピリッツにあふれたご意見を賜りまして、それをこの委員会の一つの理念として、元気な、そして、遠慮のない意見を交わしてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ここから議事に入りたいと思います。

カメラの方、大変恐縮ですが、時間ということでご退席いただきたいと思います。

それでは、議事に先立ちまして、お手元の資料を事務局からご説明いただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

細井スポーツ振興部長 それでは、お手元のカラー版の資料をご覧いただきたいと思えます。

資料1は、今期の審議会でご審議いただく新たな「スポーツ振興基本計画」の大まかな柱立ての事務局案でございます。 から まで3つの柱がありますが、本日は、真ん中にあります、 の「『10年後の東京』の実現に向けて - スポーツが都市を躍動させる - 」をテーマに、オリンピック招致都市にふさわしい首都東京の将来像について、広い意味での都市づくりとスポーツという観点からご議論いただきたいと思えます。

続きまして、次のページの資料2でございます。「10年後の東京」を実現するために掲げられた8つの目標それぞれについて、スポーツ振興との関わりをまとめたものです。目標に向けた施策の展開によって実現するスポーツ都市東京の姿を、真ん中のピンク色で示しております。その右にある点線の中は、東京都をはじめとするさまざまな主体が、スポーツ都市東京の実現のために取り組むことが必要と思われる事例を、ご議論の参考として示したものでございます。

3ページほどありまして、最後のページ、資料3は、東京都が本年1月に、20歳以上の都民3,000人を対象に行った、体力や地域でのスポーツ活動に関する意識調査の結果の抜粋でございます。これによりますと、1番の「現在の健康状態」については、27.1%、4人に1人の方が、余り健康ではないと回答しております。

2番の「運動不足の感じ方」では、運動に関しては、赤で記載している76.4%、実に4人に3人が運動不足を実感しているところでございます。

3番の「運動・スポーツの実施頻度」ですが、20代から40代の働き盛りの方々のスポー

ツの実施率が低くなっておりまして、このあたりがスポーツ人口の拡大に向けたポイントの一つになるかと存じます。

次に、4番の「地域におけるスポーツ振興に期待する効果」といたしましては、多くの方が、高齢者の生きがいづくり、子どもの体力づくりを挙げておりまして、少子高齢化におけるスポーツの重要性についての認識が深まりつつあるところでございます。

次に、5番の「クラブ・同好会への加入状況」につきましては、半数近くの42.3%の方が加入したいと思わないと答えております。その理由としては、時間的な制約や経済的な問題を挙げる方が多くいます。

さらに、6番の「運動・スポーツを行った場所」ですが、最も多かったのが、道路や遊歩道の45%でした。本来、道路はスポーツの場としてつくられたものではありませんが、身近なスポーツ空間として都民に利用されているという現状を示しております。その一方で、最後の地域の学校の体育施設は7%にとどまっている状況でございます。こうしたところから、身近で気楽にスポーツに親しめる場や機会の提供について、今後どのように取り組んでいくかが、「10年後の東京」に示した、生涯スポーツ社会の実現に向けた大きな課題と思います。

以下、7番の「公共スポーツ施設に望むこと」、8番の「運動やスポーツ振興のために必要なこと」についての調査の結果を記載してございます。

資料の説明は以上でございます。本日は第1回目の審議会ですので、委員の皆様には幅広くご意見をいただき、ご議論をしていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

杉山会長 細井部長、ありがとうございました。

今、細井部長からもご発言がありましたように、本日は1回目ということで、このテーマにと絞ることなく、今ご説明いただいた全般を通じて皆様方の多様な意見を承りたいと思います。

ただ、ここを貫いておりますことは、現在の都市とスポーツ、あるいは、スポーツと都市といったようなことが大きな柱になっていることが伺えるわけですが、この件について、冒頭にお話を進めさせていただいて、その後でまた逐次ご意見を賜りたいと思います。

本来、ここで岡野俊一郎委員に、ご承知のとおり、岡野さんはIOC委員でいらっやいますので、現代の都市とスポーツということでお話を伺えたらと思っておりましたが、先ほどご紹介がありましたとおり、サッカーのお仕事でご帰国が遅られるということも

ありまして、わざわざ岡野さんが今日のためにメモをつくって、ご出席になればこれを言いたかったというものを書いてくださいましたので、お手元にお渡しいたしましたので、簡単に読み上げさせていただきたいと思います。

岡野さんが、このようなことをメモしてお預けいただきました。

スポーツ振興を都市づくりと関連づけて論じることは、これからの東京のあり方を考える上で極めて重要です。なぜなら、都市づくりは利便性を高めますが、それは反面、必要な身体的刺激を減少させるからです。すべての人々がスポーツに積極的に取り組み、楽しく汗を流すことで、子どもたちは元気になり、お年寄りには健康な生活を送れるようになります。少子高齢化が進む中で、スポーツの重要性がますます大きくなっていくことを認識すべきです。

こうした中で、オリンピックは、子どもからお年寄りまでスポーツへの興味を持たせ、夢と感動を与えてくれる絶好の機会となるでしょう。オリンピックの招致を機に、東京は長い視点に立って、地域住民の相互交流を活性化するような、人に温かい都市づくりを目指していくべきです。今こそ、住む人の心と体の健康を考えた「都市とスポーツ」のモデルプランを東京が世界に示すことが必要ではないでしょうか。

岡野さん、ありがとうございました。このようなご意見を賜りました。

先ほど、資料3の中で、運動・スポーツを行った場所として道路や遊歩道ということが、赤い字で示されたほど多くて、実は、岡野さんは、自分たちの子どもの頃は大したスポーツ施設はなかったけど、道路で体を鍛えたし、道路で友達をつくったということ、岡野さんは、ご自分で大好きな言葉、ご自分で大好きな例としてよく言われています。45%もあるというのは、東京のスポーツ施設は十分かなと、ある意味では、遊び場所は十分かなと思いますが、岡野さんからこのようなご意見をいただきました。

また岡野さんがご出席いただくときにご意見を賜るとして、東京のこの大きな目標の中で、先ほど申し上げました2016年の夏のオリンピックが大きな柱になってまいります。毎日のように、そのことで、ご苦労というより、すばらしい活動を続けておられます河野副会長は、その事務局長として先頭に立っていらっしゃる方です。ひとつ、この岡野さんを受けて、あるいは、東京が今目指すもの、そして、東京が描いているものをお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

河野副会長 ありがとうございます。

岡野さんのこの趣旨を拝見していて、私が一番感じたキーワードは、「汗を流す」とい

うことではないかと思っております。汗をかくということはありますけれども、都市が健康であるためには、多くの人が汗をかく環境が必要だし、汗をかくことを続けていけることが重要です。

それから、ここにもありましたけれども、人間が汗をかく行為をやめると、だんだんアクティビティが下がっていくということは、多分、古来よりわかっていたと思いますので、岡野さんのメッセージのキーワードは、汗をどうやってかくかということなのかなと思っております。

ちなみに、私は冷や汗ばかりかいておりますが、東京オリンピックについても十分汗をかいて前へ進めたいと思います。

この中で、「都市とスポーツ」ということがありましたけれども、実は、新たなスポーツ振興基本計画の柱立てということですが、多くの方はご承知おきのように、この「スポーツ振興基本計画」という言葉が余りにも出すぎているという感じがしました。2000年に文部科学省がこのスポーツ振興基本計画を出して以来、各自治体が取り組んでいます。ただ、残念ながら、これは誤解を恐れずに言いますと、どの都市のものも名前だけを変えれば大体同じということで、金太郎飴のようなアイデアが出てきています。

ぜひ、ここでは、東京オリンピック招致のことにあえて触れさせていただきますが、資料1の真ん中にある「10年後の東京」をどう組み込むのか、どう踏まえるのか、これをしっかりと踏まえたスポーツ振興方策の基本的な考え方を出すことが、まさに東京でなければ出せない、つまり東京がロールモデルになるような、こういう言い方は怒られるのかもしれませんが、やはりこれが必要だろうなと思えます。

やはりその8つのことを、オリンピック招致でも大いに訴えておりますし、オリンピックが来ることによって、この8つのことが、さらにオリンピック招致が、オリンピック大会の開催が一つの触媒となって前に進むと、今、IOCの方に訴えておりますので、ぜひここでは、「都市とスポーツ」という一般論ではなくて、東京のこの8つの実現と、その汗をかくということを色々な角度から踏まえた議論ができればと思っております。

ちょっと雑駁になりまして、失礼いたします。

杉山会長 ありがとうございます。スポーツ振興基本計画も、去年が真ん中の年だったと思います。多くの理念といたしますが、アピールしたものが、市民スポーツ、生涯スポーツ系のアピールだったような気がしますが、またこれも新しい方向に向かう時期に来たのではないかと思います。河野副会長が毎日汗をかくとか、あるいは、冷や汗をかくとか、

また怒られるかもしれませんがおっしゃっていますが、大体、察しはつきますが、どうぞ委員の皆様、そこを恐れず色々ご発言をいただきたいと思います。

さて、ここからは皆様方からさまざまなご意見をいただきたいと思いますが、先陣を切って山崎浩子委員、いかがでしょう。「10年後の東京」でも結構ですし。「10年後の東京」というより、身近に感じていらっしゃる人が多いと思います。またジャーナリスト的な活動もなさっているし、その辺りから見たご意見をいただきたいと思います。どうぞ。

山崎（浩）委員 よろしくをお願いします。

私は、新体操の強化本部長を今させていただいているのですが、仕事柄、人の姿勢に目が行ってしましまして、歩き方とか、非常に目につきます。きちんとした歩き方をしている人がほとんどいません。内股で、おなかも背中も丸くしてたらたら歩いている人たちが数多くいます。

というのは、運動をしていないから、背骨を支える筋肉がなくて、あの歩き方では、きっと頭のほうにも血は巡っていかないだろうなという歩き方をされている方が非常に多いので、運動の習慣が本当に少ないのだなと。

それは子どもたちにも言えて、きちんと立てない、きちんと歩けない、きちんと座れない子どもたちがたくさんいます。やはり、運動する機会が少なすぎるのではないかと思います。それを補うためには、時間をつくって、例えば、学校に登校してきたら、朝の30分、40分は、必ず人と接触して遊ぶとか、校庭で遊ぶ習慣を作るとか、そういうことで基礎体力を作っていないと、体を動かそうという気にもなかなかならないのではないかと思います。テレビゲームで親指の機能は発達しているかもしれませんが、全体の機能は非常に衰えていると思いますので、全員が体を動かせる、基礎体力をつくれる時間を設けていくことが重要ではないかと思います。

美術とか音楽、体育とか、受験には余り関係ないであろう、重要視されていないであろうものを、もっともっとポイントに置いてやっていくと、人間の基礎体力、基礎能力がついてくると思います。

私は、2つのそうぞう力があればどんな世界でも生きていけると思っています。それは、物事を考える、想像する力と創り出す力、その2つのそうぞう力が余り発達できないような環境にある。例えばテレビゲームにしても、その枠の中で遊ぶことはあっても、何も無いところから、私たちの時代のように、棒切れ一本からでも遊びを作り出すという環境が

なさすぎる。だから、小さい時から、そういう風に物事を考えたり、作り出したりする機会が少なすぎると思います。

なので、そういう事も、学校の何十分かは、最初は何もできないでしょうけれども、何かを作り出す時間を作ろうと。そういうことで、昔の状態、環境を与えることが必要ではないかと思っております。そうすると、運動したいという気持ちも湧いてくるでしょうし、考えたいという気持ちも湧いてくるでしょうし、こういうことをやっていくと、10年後の子どもたちは変わってくるのではないかと思います。

杉山会長 ありがとうございます。

「体を動かしたくなる東京」、「体を動かそう東京」、新しいキャッチフレーズかもしれませんね。先ほど、河野さんがおっしゃった、汗をかくというところに興味があったというお話もありました。

山崎泰広さん、ご意見を續いていかがでしょう。

山崎(泰)委員 では、意見を申し述べさせていただきます。

私は、振り返ってみたところ、実は、この委員会の前に、体育施設運営審議会というものがあった、その委員になったのが1993年で、それから14年間も委員をさせていただいています。この間に、障害者のスポーツに関しては大きな変化がありました。最初、私がこの委員会でやったのは、バリアフリーにして、施設の中に車いすの人や障害を持った方たちが行けるようにして、運動ができるようにするという事でした。また、その頃は、障害者スポーツ＝リハビリだと思われていたので、私が、競技スポーツにもなり得ると言った時にものすごいバッシングを最初の頃は受けたりしました。

そこで、障害者のスポーツの雑誌を作ったり、いろいろなことをして意見を変えていって、私が選手として出場したバルセロナの時には報道はゼロでしたが、アトランタの時に私が引っ張って行ったテレビ朝日が、その時はNHKさえ行かなかったのですが、テレビ朝日が初めてニュースステーションで報道してくれて、そして長野パラリンピックにつながって障害者スポーツが市民権を得たという感じだったと思います。

環境はすごく良くなってきています。ただ、そこでまた新しい変化として、障害を除去してあげて使えるようにしてあげるバリアフリーということから、ユニバーサルデザインという、本当に誰もが使えるという考えに今はなっているのですけれども、「ユニバーサルデザイン」という言葉が一人歩きしてしまっていて、実際には使えないものも多いのが現実です。車いすの人以外は誰でも使えるというものがあったり、車いすの人は、人

が手伝えれば使えるとか。それは、外国では「条件付バリアフリー」と言って、本当の意味でのユニバーサルデザインとは言えません。

今から、2020年のことを考えると、団塊の世代の方が70代に突入していかれるということで超高齢化社会になります。そのときに対処型のバリアフリーをやっていたのでは絶対に駄目だと思います。高齢者の人が来たから駅員が出て行って助けるとか、体育の施設で裏から入れてあげて使わせてあげるといふことでは無理だと思います。ですから、私は、ぜひ、このオリンピックを機会に、せっかく予算が付くのであれば、今までの対処型のバリアフリーから、本当にユニバーサルデザインで、本当に多くの方、体に障害を持った方や妊婦さんなど色々な方がいますよね。そういう全ての方が、裏口から入るのではなくて、メインストリームとして使えるような形になっていけばと思います。やはり使いやすい環境がなければスポーツをしないので、そういった形にするためのお手伝いできれば大変嬉しいと思っています。

杉山会長 ありがとうございます。障害者の方のスポーツが、多くの場合というよりも、ついこの間まで、やはりリハビリテーションというようなことで、競技スポーツとしてとらえる視点はごく最近だったような気がします。山崎さんはその辺り、非常に情熱的に行動されていたと私も存じあげております。ありがとうございます。

次に小林さんにご発言いただきたいと思いますが、小林さんにちょっと質問をしたいと思います。小林さんは、野球ごっこはどこで覚えられましたか。野球というスポーツは、路地ですか。それとも、もう既に野球部でいらしたわけですか。

小林委員 私は間もなく40になろうとしているのですが、私ぐらいの年であれば、自然に何となく始めたと思います。記憶にあるのは、路上での三角ベースから入って、それから近くのお寺であったり、私が当時住んでいたところに総持寺というお寺があったのですが、そこでやったり。そうした環境の中で大きくなりました。

杉山会長 小林さんの頃は、まだそういう環境があったわけですね。今のよう、家に入りきりの少年たちではないと。その後でしょうか、先ほど山崎浩子さんがご指摘になった、歩き方も、子どもたちがどうも頼りなくなってきたのは。

小林委員 そうですね。今、私は半分は福岡で過ごしているのですが、福岡の子どもが、みんながみんな歩き方が悪いというのではなくて、それは一部だと思いますけれども、確かに、今、公園でキャッチボールができる環境がないとか、それはもう野球に限らず、ボール遊びができない環境があると思いますので、自由に遊ぶ環境がなくなっているのは間

違いがないと思います。

杉山会長 どうぞ、引き続きご発言があれば。

小林委員 小林と申します。今回呼んでいただいたのは、昔、私がプロ野球でプレーしていたという選手の部分と、現在は大学の教育としてそちらの方面を多少かじっていると。また、今、プロ野球の球団経営に少し携わっているというような部分で呼んでいただいたのだと思います。

ぜひ、東京には、オリンピックを契機に、トップスポーツの部分ですけれども、スタジアムとか競技場をもう少し世界のトップの都市にふさわしいものにぜひ変えていただきたいと考えております。

実際、私はアメリカに7年住んでいまして、多くの街を訪れ、その野球場、フットボールのスタジアムに行きました。それと比べると、東京に今あるスタジアムは非常に古くお粗末なものが多いと思います。東京ドームのように、建築技術としては優れているとしても、どうしてもその街にフィットしていない。フィットしていないという言い方は語弊がありますが、アメリカの場合、90年代以降に建てられたものがほとんどでありまして、それに比べると非常にお粗末だと感じておりまして、やはり一流の都市としてのランドマークという部分は、実は非常に重要だと思っております。そこで得られるスポーツツーリズムとか、そうした観光収入という経済面もさることながら、やはりそういうスタジアムを見て、そこで行われるプレーを見て子どもたちが憧れて、そして、その運動を、たとえそれがプロにならないにしても、そうしたものに憧れて運動を継続すると思っております。

また、オリンピックということで期待しているのは、これもアメリカの例ですけれども、今ある大リーグの球場やフットボールの球場は、ほとんどが税金で建てられています。税金で建てられて、その球場をプロスポーツのチームがほとんどただで借りている。たとえばミルウォーキーブルーワーズは、年間1ドルの賃貸料で、公営スタジアムを365日占有しています。それがいいかどうかは別にして、公共のお金を使ってスタジアムを建てるというのは、そこにある街のアイデンティティであるとか、都市としてのランドマークとしての機能とか、これは昔のローマ時代からで、皇帝は、町のシンボルとして大衆の心をつかむためにコロセウムを建てたという昔からの伝統がありまして、ぜひそうしたところを含めて、この東京オリンピックに期待しております。

杉山会長 ありがとうございました。

3人の方のご意見を伺ったところで、石原知事、ご感想やご意見、今までの発言の中で

何かいただければと思います。

石原知事 僕は、日本人にはスポーツのバリエーションが多すぎるんじゃないですかね。それを全部施設としてかなえるのはとても大変なことだと思います。

それから、今、小林さんがおっしゃったことは大事ですが、アメリカは税制が日本とは違っていて、文化とか教育、スポーツも含めて、それに対する寄付は無税です。この控除がないと、地方にとんでもなく大きな企業があって、法人税を払うだけではなくて、例えばファナックというコンピュータの有名な会社が、これは山梨県に忍野という村にあります。あそこなども、やはりあれで随分と山梨県は儲かっている、得していると思うけれども、ああいうものがもう少し寄付行為をすれば、忍野なら忍野というところにまことに稀なる施設ができたりするけれども、全部税金といっても、国費とか公費でやれというのはかなり難しい問題があります。

逆に金子さんにお聞きしたいのですが、私、この間、北区のあそこに行って、多分あなたはあそこで鍛えていらっしゃると思うけど、ああいう施設は、例えばシンクロナイズドスイミングというのはごく限られたスポーツで、日本は強いからみんな注目しますが、あれは余りやる気にならないスポーツです。私から見ると苦しそうで。ああいうためのトレーニングセンターというのは、例えば、日本にもう数カ所要りますか。ああいう種類のスポーツはあそこ1カ所で十分ですか。あったにこしたことはないでしょうけど。

金子委員 今までは本当に、私たちも、施設にはとても苦労して、ジブシーのように練習してきましたので、あの施設ができたときは夢のようだと思いました。やはり、場所は1カ所で、特に私どもなどは穴蔵のようなところで練習しておりますので、これがもっと高地トレーニングができるような、山の環境の中にもプールがあり、冬のスポーツも、夏のスポーツも一緒になってできるような施設があり、また、もっと南の海辺の近くのところに施設がありというように、数ヶ所できればもっといいなと思います。あそこ一つだけでは、全ての強化で使うには難しいということも、もう3年余り使ってまいりまして、つくづく思っております。もっともっと日本じゅうにこういうものが広がっていくといいと思います。

石原知事 しかし、なかなか大変だね。プールだって大変だから。

それから、秋川高校という学校があきる野市にあります。これはどういう学校かというと、廃校になったんですが、かなり贅沢な高校で、日本が高度成長にかかったときに、海外進出する時に、今ではどこの企業も家庭ごと人材を移動させますけれども、その頃は単

身赴任でした。その残った子弟のためにつくった学校で、グラウンドが3面あって、プールは25m、立派な二階建てのものがあつたり、柔剣道場、室内体育館があつて、立派なドミトリーがあるんです。これが廃校になってしまった。周りに人がいなくなったので。そのころは特殊な目的で、それにかなうだけの需要があつたのですがね。

これを、日体大に何とかしろと言つたら、結局、乳母日傘なんだな。東京がお金を出してくれたらやりますみたいな話で、駄目だとこの間、突き放したんですけどね。皆さん、また一回お暇なときに見ていただくと、これは素晴らしいですよ。アイビーリーグのどこかの学校かと思うぐらい、小さなカレッジぐらいに施設が潤沢で。あんなものの活用も。

大体、皆さんから出てくる意見はわかっています。それをどうファイナンスするか、どういう形で運営するかが問題なので、ソフトは案外出てきます。スポーツは限られた人の領域のものだから。そこでやれば、子どもたちも、一貫教育で、ドミトリーで進めば、非常に幸せな青春を送れると思うし、そういうケースが日本にはなくなってきたのですね。

あれをどう運営するか、また皆さん、知恵を貸してください。結局、そうするとお金の問題になって、お金の問題になると、私もずっと政治家をやっていたからわかるけど、税制です。日本はそういう点で大蔵省が無能なものだからね。一番利口だと思っていたら、実はバカで、場当たりのことでこんなザマになってしまった。本当に惨たんたるものですよ、日本は財政の上では。だから、余りそっちで期待して、乳母日傘で国と言つても、これは通用しませんね。

読売なんか儲かっているんだから、ツネさんに言って少し出させてくれないかね。ああいうワンマンがいるんだから。ジャイアンツだけじゃないよ。

杉山会長 シンクロナイズドからジャイアンツまでという話になりましたが、引き続き、金子さん何かご発言があれば、今、知事のご質問に答えていただいたような形ですけれども、ご発言があれば、お願いします。

金子委員 私は、東京生まれで、東京で育ってきておりますので、自分たちの小さいころ、河川敷で遊んだりしました。その頃に比べてみると、今、東京の川という川がみんなきれいになったり、河川敷も緑がきれいに整備されて素晴らしくなっていますし、公園なども大変整備されてきていると思います。この振興計画を読ませていただいても、このように10年後、ハードな部分が整備されていったら、これは素晴らしいと思いますけれども、実際に、本当に多くの方がこれに参加して、現実問題として多くの人たちが活用で

きるかということのソフトの面もしっかりと考えていかないと、成功には至らないと思います。

そういう意味で、今、スポーツといえば塾のようになってしまっていて、あるスポーツクラブ、一流の指導者がいるところにお金を払わなければ習いに行けないような、そんな傾向にも国の中で少しなっているかなと思うんですけれども、誰でも、東京都に生まれて、都民であれば、幼少時から高齢化した方たち、また、先ほど山崎（泰）委員からもご発言がありましたように、身障者の皆さんも、どんな方でも参加できる、段階的に参加できるようなものをきちんと整備しなければ、夢のようなものを描いただけで終わってしまうだろうと思います。

国の振興計画の中に広域スポーツセンターの使い方みたいなものが何年前に盛んにうたわれていましたけれども、これを区域スポーツセンターという形で、各区域でしっかりとしたスポーツ政策を、東京都の中心がきちんと握ってやるべきではないかと思います。東京都の中に、体協を中心とした、各スポーツの指導資格を持った方が、恐らく、何万人という数でいると思います。そういう方々が、持っているだけで別に何もしていない。地域で野球少年などの面倒を見ているのは、商店の時間のあるお父さんであったり、スポーツが好きなお兄さんであったりというような形ですから。そうではなくて、そういう方たちの名前をきちんとリストアップして、区域にどんな指導者がいて、その人たちがボランティアの形でどれだけ参加してくるか。その人たちに東京都のスポーツ政策をきちんと同じ視点で持っていただいて、そして、全部の区域に広げていく。例えば、日曜日には、学校の運動場も使うとか。

ラジオ体操は素晴らしかったと思います。朝の6時半近くになると、どこの家からもおじいさんも、お父さんも、みんながこぞって学校の校庭に集まってくる。あんなようなことがまた実現可能であれば、そこに集まった子どもをみる人、お年寄りをみる人、若者を対象にする人というように、そういうネットワークがきちんとしてくれば、いろいろな問題が、高齢化社会の問題点、あるいは、親子関係、地域との触れ合いの関係、そういうものが全て、色々なものが網羅されて成功していくのではないかと思います。

また、競技の一流選手を東京都で育てたいということが強化委員会の方でも出ていましたけれども、育てたいと言っていけば出てくるものではないと思います。本当に赤ちゃんの時から、幼少時から、みんなが何らかのスポーツあるいは遊びを含めたそういう活動に参加することによって、意外なところから意外な能力を持った子たちが見出される。そし

て、スポーツが好きな子はスポーツを続けていく。あるいは、そこから文芸的なものに進む子は進んでいったらいいというような、スポーツをだれもが、国民皆泳ではありませんけれども、だれもが一度は、区あるいは都の政策のスポーツの中にまず浸ることからスタートするところまでやれたら、素晴らしいだろうなと思います。

杉山会長 ありがとうございます。

皆様の意見はまだまだ続くと思いますが、ここで知事はお時間と聞いております。どうもありがとうございました。

石原知事 その前に一つ。今も金子さんがインストラクターの話をされましたが、要するに、こういうスポーツをやってみようと思っても、日本はなぜあんなに座学が要るんですか。くだらない座学を延々とさせてね。僕なんか、昨日も行ってきましたけど、ダイビングはセミプロみたいなものです。僕は人に教えるとき、肝心の、昔の潜水艦乗りが教えたのと同じように、それしか教えない。これに気をつければ死なずに済むよと。何かぐちゃぐちゃ、耳の構造とか肺の気圧だとか、そんなものは何の役にも立たない。座らせてやるんですよ。

だから、もうちょっと、スポーツのインストラクションというのは、考えたらいと思うけど、下手だね。あんなもの頭でっかちになったんじゃ。私はずっとヨットをやっていたんですけど、小型船舶操縦士なんてますます難しくなってきた、僕なんか超ベテランで、僕の船はずうっとチャンピオンボートだったけど、そんな人間には全然わからない問題ばかり出るわけ。それに通らなかつたらヨットに乗れないと。本当にもう座学のくだらなさといったら。役人がああいうことを作るんでしょうね。好きだから。自分は動けないけどね。

それはやはり現場の人が考えて、もう少しスポーツを、とにかく汗をかこうと思っても、頭を使ってそれこそ冷や汗をかく。そういうアプローチは本当に意味がないので、考えてくださいよ。

すみません、次があるので失礼します。

杉山会長 ありがとうございました。

(石原知事退室)

杉山会長 それでは、議論を続けたいと思います。

既にだいぶ問題点が出てきたような気がしますし、また、日ごろ考えていることに同意される方もあろうかと思えます。

次に、金さん、ご発言をいただければと思います。

金委員 今の知事の話もごもっともなところで、私もスポーツのコーチとして、確かに座学が多すぎるかなという反省をしたところです。

今、諸先生方のお話を伺ってしまして、この資料等を見て、現状はこうだと気づいたところがありまして、その辺からお話をしたいと思います。

資料3の6番、「運動・スポーツを行った場所」で一番多いのが道路や遊歩道。これは恐らくウォーキング、ジョギングの方だと思います。道路や遊歩道でできる簡単なスポーツとして、そちらを使ったのだろうと。ご承知のとおり、東京マラソンは今年が第1回で大成功に終わりました、来年も非常な倍率だと。実は、スポーツは、少し衰退していると言われている反面、そうしたジョギングとかランニングの部分は、東京マラソンなどをきっかけにして、今、人口は増えています。ただし、それをやっている人たちは中高年の方々ばかりです。30過ぎ、40過ぎぐらいから、自分の体のメタボリックなどが心配になってきて、ドクターから何か運動をなさいと進められて、恐らく、いろいろな選択肢があると思います。お金がある方はパーソナルトレーナーをコーチにつけて、月に何万円も払ってびっしりトレーニングメニューを作ってやっておられる人もいるでしょうし、時間にもお金にもやや余裕がある方は、民間のジムに行って、水泳をし、トレッドミルランニングをしたり、ウエートトレーニングをやる。それも、時間もお金もないということから、一番手軽なジョギング、ウォーキングということで選択されているのではないかと思います。

あと、東京マラソンの大きな意義は、目標ができたことです。7時間という、日本でも一番緩い制限時間が採用されましたので、それほど練習しなくても何とか完走できるのではないかという動機で出ているのではないかと思います。

それに引きかえ、一番少ないのは学校の体育施設が7.1%ということで、利用頻度が一番少ないです。これは一般の子どもたちではなくて、大人が使ったか、使わなかったかというデータだと思います。当然、学校施設は使うのに許可が必要であったり、いろいろな障壁がありますので、あまり使われていないというのが正直なところだと思います。

先ほどいろいろお話が出ている中で、昔と今では何が違うか。先ほどから、スポーツの施設をもっと拡充という話がありましたが、私たちが子どもの頃は、子どもの数が非常に多かったので、学校のグラウンドは取り合いでした。休み時間もそうですし、放課後も、部活動とか遊びで奪い合って、野球部が練習をしていたら、私はずっと陸上部だったので

すが、ボールがよく頭に当たって痛い思いをしたとか、そのくらい狭いグラウンドでたくさん子どもたちが運動をしていた。

ところが、今、実際に放課後の校庭を見ていると、それほど学校のグラウンド施設で運動している子どもたちの姿は実際には見受けられません。一部の野球少年団、サッカー少年団の子どもたちが使っているのを見ますが。これは少子化ということもあると思いますけれども、子どもたちそのものが、スポーツに余り親しんでいないというのが実感として非常にあります。

これは年齢別のデータではないので実際のところは分からないのですが、私も今、中学生の子どもがいて、子どもの行動とか同級生の行動を見ていると、本当にこの子たちは、運動部に入らなければ、恐らく、運動する習慣はないだろうなど。唯一運動するといえば体育の時間ですよね。学校の体育はもちろん実技がありますので、体を動かすことはありますけれども、それ以外では、全く運動をやっていないということで。

今回の基本計画をつくるに当たって、冒頭に河野先生から、汗をかくという、非常に端的な言葉で、そこだと思えますけれども、汗をかくということを今の子どもたちの現状に当てはめてみると、ほとんど汗をかいていないわけですよね。頭はたくさん使っていると思えますけれども。

それを、昔の遊びをやらせたらいいだろうということで、私も、NPOの総合型地域スポーツクラブを主宰しておりまして、そういった仕掛けづくりを幾つかやっているのですが、そのクラブは1週間に1回ぐらいの頻度でしかできませんので、本当に昔の遊びのようになるには、それだけの、山とか川の環境が必要であったり、あとは、ガキ大将みたいなリーダーの存在も必要だと思いますが、それもなかなか今の子どもたちに求めるのは難しい。

じゃ、運動部に入っていない子どもたちに対して、どうやって汗をかかせてあげることができるだろうと思った時には、その学校の中で、今、体育という、唯一汗をかくスポーツをやる時間があるわけですが、それは今のところ、特に小学校の場合、一人の小学校の先生が、算数から国語から、体育も含めてすべて教えている状況で、体育に限って深く、広く何かを教えたり、一緒に汗を流したりすることが。差が非常にあると思います。

そこで、文部科学省の指導要領を、国から大きく変えることはできないかもしれませんが、この際、東京都の教育委員会の管轄に関しては、例えば体育の時間、私は小学校が一

番大事だと思っているのですが、小学校のときの体育の時間に、プラスアルファでもいいですし、今ある授業の時間を少し開放して、先ほどからお話が出ていますスポーツ指導員の方、あるいは、プロのスポーツをやっていて、セカンドキャリアで子どもたちに教えていらっしゃる方も特に東京都にはたくさんいますので、そういった方たちを学校の中に少し、半分ボランティアの形でも行ってもらって、体育の授業の実技の部分を特に担ってもらえるような仕組みができればいいのではないかと思います。

これはよく、総合型地域スポーツクラブで出る話ですが、ヨーロッパでは、体育という授業は余りないと。学校でスポーツをすることはいいですね。学校で習うのは、算数だったり、国語だったり。体育の分野に関して、座学を多少することはありますが、実技はすべて放課後、地域のクラブに帰ってやるのが習慣であるということですから、地域に行けば、どこの地域にもいろいろな種目をやっているクラブが存在していて、自然に体を動かすというのがヨーロッパの方でありまして、それにならって、今、日本は総合型地域スポーツクラブを盛んに作って根付かせようということをやっている訳ですが、私も実際にやっていて、少しは広がってきたのですが、やはり学校と隔離されたところで地域クラブが広がっていくのはなかなか難しいので、もしこうした機会があれば、東京都の教育委員会の方で先陣を切っていただいて、地域クラブと学校の体育を融合させるような、そういう施策ができれば、運動を全くしない子どもたちにも多少習慣づけるのかなという考えを持っています。

杉山会長 ありがとうございます。学校体育と地域スポーツクラブというのは、新しい面で、掛け声、あるいは、そういう意見が出ながらなかなか具体的にない非常に大きなテーマだろうと思います。

現状の学校体育ということも大きな問題だろうと思いますので、中川恵委員、木内秀樹委員からご発言をいただきまして、現状の解説並びにご意見があれば賜りたいと思います。

中川さんからお願いします。

中川委員 私は東京都の高等学校の体育連盟の会長を仰せつかっていて、そういう立場でここに参加させていただいていると思います。しかし特に高等学校だけではなく、今お伺いしている話の中で、資料2の最初のところにある、都市づくりの関係の中に出ている校庭芝生化の問題は、今、ご意見が出ていた、小学生時代の子どもたちが体を動かすような環境をつくってあげるという意味では、とても大きいのではないかと思います。

先日も芝生化のフォーラムがあってそれに参加してきましたのですけれども、学校だけでは

芝生のグラウンドを維持していくことはなかなか大変なようで、専門家の知識と地域の協力を得ながら、うまく芝生のグラウンドを維持している幾つかの学校の例が発表されました。これはぜひ広げていっていただきたいと思います。そうすれば、小さい時期から子どもたちは体を動かす。動きなさいとか、こういう遊びをきなさいと言わなくても、自然に子どもたちは動き始めるのではないかと思います。

ただ、これが中学校とか高等学校になっていった場合、芝生化の問題はなかなか厳しい面もあるのかなと思います。それは、私が今、所属している桐ヶ丘高校も、この冬に芝生の工事に入りますけれども、私がいるところは、東京都で最初のチャレンジスクールといって、不登校経験のある子どもたちも、自分の夢を実現できるようにということで設立された学校なので、部活動そのものは、やっている子たちは一生懸命にやっているのですが、数が少ないです。ですから、芝生にしても、その使用頻度というか、養生期間が取れると思います。しかし、部活動が盛んな学校になると、養生期間を考えると、芝生化はなかなか厳しいのかなと思います。だから、東京都の公共の施設の芝生化も進めていって、中学生、高校生の部活動の発表の場である大会などが、そういういい環境でできるようにしてあげることが大事なことなのかなと思います。

あと、もう一つだけお話しさせていただきたいと思ったのは、汗を流すということが他の委員のご意見の中から皆さんお話しされていましたが、ここにつなげるためにも、やるスポーツ、見るスポーツのほかに、スポーツに係わるというアプローチを進めていく必要があるかと思います。これは、今年のインターハイ、高校生の総合体育大会が佐賀で行われたのですが、県ぐるみで盛り上げようということで、一人一役運動として多くの人たちが色々な形で関わっています。そういう動きを進めていくために、実行委員の、実際にやっているのは高校の先生ですが、その先生がおっしゃっていたのは、係わるスポーツを随分、県民の皆さんにPRしていったということです。だから、それこそ町のおじさんも、おばさんも、おじいちゃん、おばあちゃんも、インターハイに何らかの形で係わる。そこから、実際に見てみようか、やってみようかという動きになってくる。そういう動きを作れるのかなということを強く感じました。

その意味では、東京マラソンをやったり、その中で、高校生も2,500人ぐらいが昨年度のボランティアに出たという話を伺っていますので、そういうような、スポーツイベントへの係わりをPRしていくことも、一人ひとりが汗をかく、そういう東京を目指す上では必要な段階もあるのかなということを感じましたので発言させていただきました。

杉山会長 ありがとうございます。

木内秀樹委員。

木内（秀）委員 木内でございます。私は私立の中学高等学校の校長、幼稚園の園長もしておりますので、そういう立場からお話をさせていただきたいと思います。

何人かの委員から出ましたように、スポーツは子どもたちにとって重要な意味合いを持っております。それは、体力づくりはもちろんですが、精神的なタフさ、集団活動の中で協力する精神、スポーツのルールの中で規範を守る。例えばラグビーなどでは、審判がいて、これは違うと思っても、審判がこうだと決めたことについては文句も言わない、抗議もしない。今は、キャプテンが少し抗議できるようですが、オールブラックスなどではそういう例もあります。そういうルール、規範を守るといっても、今、学校教育、社会全体の教育の中で薄れている部分を、スポーツを通して子どもたちが学べるということがすごく大事だと思います。

先ほど、スポーツ振興基本計画をざっと見せていただいて、まだ深くは読んでいないので分からないのですが、8番に「次代を担う子どもたちに夢を与える」ということがありますけれども、もう少し、子どもたちを育てるという視点から、施設とか色々なものを見直していただくことも必要ではないかと思えます。

もちろん、一流のアスリートのための施設も必要だと思いますけれども、一般の都民、先ほど金委員、ウォーキングとかジョギングのということがありましたけれども、それをもう少し整備すれば、一般の都民ももっとウォーキングやジョギングをしやすいでしょうし、さらには、スポーツジムとか大人だけの世界ではなくて、休みの日とか、朝とか夜とか、親と子どもと一緒にウォーキングしたり、ジョギングしたりという、家族のそういうこともできるような施設。例えば、松本清張の『点と線』ではないですが、ただ道路があるだけではなくて、どこかに着替えの場所があったり、休める場所が作られたりということで、それがもっと利用しやすくなるという面もあるかと思えます。

ヨーロッパで、先ほど、学校の中に体育の授業がないということをおっしゃられたのですが、先日、私も修学旅行で中国の北京に行ったのですが、北京も同じだそうです。学校の中で体育の授業がないと。学校は勉強を教えるところで、じゃ、学校が終わった後で、それぞれスポーツを普通に楽しむのか、それとも一流の選手を目指す子はそれなりの体育学校みたいなものがあるって、ダブルでそちらに行ってスポーツを楽しんだり、鍛えたりするということをやっている。まさに、今伺いすると、中国もヨーロッパと同じだなと思

ったのですが。

一方、日本の現状を考えると、昔から学校教育の中に体育の授業があって、学校の授業が終わった後にクラブ活動があって、その中で、指導者は、学校の先生とか先輩が来てそこで指導をしているという歴史的なものがあります。私は、これは素晴らしいと思います。では、ここで、ヨーロッパとか中国みたいに社会体育に変えて、場所を提供してできるのか。それは長い時間をかければ可能かもしれませんが、今の段階で、学校体育の中でクラブ活動を推進したり、施設を整備して使いやすくしたり、開放したり、そういうことによって、さらに今ちょっと衰退しつつある子どもたちへのスポーツをもう少し盛り返すということは、これは一番手っとり早いし、重要なのではないかと思います。

例えば、預かる立場で申し上げますと、クラブ活動は本当に衰退しています。例えば、私の学校のことを申し上げますと、体育の先生が若いころ20代で入ってきて教えていく中で、年をとってくるんですね。そうすると、50を過ぎてくると、クラブ活動の顧問、教えるのはもう勘弁してくれと。もう体が動かないから他の人にやらせてくれと言うのですが、若い先生もなかなか入ってこない中で、どんどんクラブ活動を見る人がいなくなる。そうすると、外から技術指導をする人を引っ張ってこなければ成り立たないということもあります。

もう一つは、数年前からあるのですが、厚生労働省のほうで、労働時間の関係で、例えば学校であれば4時半までが就業時間だとすると、それ以降は残業だと。残業手当をつけているのかとか、そういう調査が入ります。学校でクラブ活動を見る人が、4時半以降は残業だ、残業手当を払っているのかと言われたら、それはもうできないですよ。

公立でクラブ活動が私立よりも衰退しているというのは、金銭的なものとか、労力が余り報われないというところで、やる人がいなくなっている。そういうことにも起因するのではないかと思います。

そういうように、今の情勢の中で、学校の中でクラブ活動がやりにくい状況が今はどんどん強まっていますけれども、私としては、先ほど申し上げたように、学校の中のクラブ活動をもう一回盛り返してさせるようにすることが、子どもたちにとって一番手っとり早い、スポーツを通して人間づくりをする一つの方法ではないかと思います。

もう一つだけ付け加えさせていただきますと、オリンピックに関して言えば、私学は都内の私学全校が東京のオリンピック招致に賛成をして、先日も署名活動をして、たくさんの署名を、もうそろそろお届けしているかと思います。私は団塊の世代で、中学生になっ

たころ東京オリンピックで、私は柔道をやっていたものですから、猪熊さんの試合を見て感動した覚えがあります。そのように、一流のスポーツを見て感動するということが、一つは、見るスポーツとしての価値もありますし、自分もやってみたくて体を動かす方向に刺激されるということもあるのではないかと思います。

見るスポーツとしては、私どもも、野球は弱いのですが、サッカーは今回、都大会で、Aブロックというところで今ベスト4になっていますが、学校全体で大いに、仲間がやっているのだから、自分はサッカーをやっていないなくても、仲間がやっている姿を応援に行こうと。そういう、「チーム成徳」と我々は言っているのですが、仲間意識を醸成するには、見るスポーツもすごく効果があると思っています。

以上です。

杉山会長 ありがとうございます。日本の伝統的なスポーツの中心といたしますが、軸となってきた学校体育、教育現場でのスポーツ体育、そして、皆様方の多くが携わっていらっしゃるスポーツ、この問題は非常に大きな問題で、これだけ論じ合っても新しい東京のスポーツということが打ち出せるのではないかと思うくらい大きな問題です。

今の、お2人の委員のお話を聞いても、お立場で相当いろいろなものの考え方といいましょうか、現状が浮き彫りにされたような気がします。また改めてこの問題については、皆様方と意見を交換することができればと思います。

もう一つ。スポーツの切り口の一つとして、レクリエーションという視点がありますね。日本の場合、sportを「体育」と訳し、「運動」と訳し、「競技」と訳し、「勝負」と訳し、「鍛練」と訳して、さらに、recreationはスポーツの訳語ではありませんが、多様にスポーツをとらえているということがあります。そして、スポーツの中から楽しみに展開していくことも大きなうねりになりつつあります。その代表という言い方は不適當かもしれませんが、丸山さん、そのあたりをひとつよろしく願います。

丸山委員 杉山会長さんからご紹介をいただきましたけれども、私は、「みんなのスポーツ」と言えばいいのでしょうか、誰でもが楽しくスポーツに親しめるということを活動目標にしている組織に所属しておりますので、そういう立場から少し意見を申し上げたいと思います。よろしく願います。

まず、私は、この新たなスポーツ振興基本計画、つまり、「『10年後の東京』の実現に向けて」というものを拝見して、これは、スポーツ振興基本計画を、こういう視点で作っていくことはすごく面白い。面白いという言い方は語弊があるのですが、東京らし

くていいかなと、まず印象として思いました。

私は、この資料3のところ、一つは3番のところ。「運動・スポーツの実施頻度」とありまして、赤い字で、確かに、20代、40代が低い。何と、一番多いのが60代、次が70代で、そして50代と。これは、この数字を見なくても、現実に私どもが地域でスポーツの色々な場を設定して、一般の都民の方においでいただくのですけれども、圧倒的に高齢者です。若い人は、ゼロではないけれども、余りいらっしやらない。

実は、高齢者は、既に子どもを育て上げてしまった、仕事もほぼ終了している方たちです。私どもが一番参加していただきたいのは、まさにこの赤字で書いてある20代や、4代のお父さんやお母さんたちにぜひ参加していただきたいと思って企画するのですが、なかなかうまくいかないところがあります。

それで、先ほど、1から8までの項目の中で、第1項目。「水と緑の回廊に包まれた、美しいまち東京を復活させる」と、最後の「スポーツを通じて次代を担う子どもたちに夢を与える」という、この両項目に、子どもが生きいきとして駆けずり回っている様が述べられていますが、実は、子どもの中で、幼児は、棒切れ、石、木の葉を使って、想像たくましく遊びます。ところが、その親たちが、遊んでいては駄目だとか、あるいは、汚したら洗濯するのが大変だから遊ばないでねというのはよく聞きます。ですから、小さい子はかなり遊ぶ意欲はあるけれども、だんだん遊ばなくなるのではないかと思います。

そこで、どうしても若い世代のお父さん、お母さんたちを楽しいスポーツの場に引っ張り出すことで、親子一緒にスポーツに親しむような環境ができていくのではないかと考えて、最近、「親子体験の集い」など、親子をセットにして、若い親たちをねらって、そういう場を幾つか設定してみました。

特にキャンプとかウォーキングとか、今、ニュースポーツと言われているようなものを題材にして行ったところ、親子キャンプはお断りするほど集まってきました。若いお父さんたちが大勢、子どもを連れて集まってくる。やはりそういう親子でできるようなスポーツをたくさん提供していくことで、若い親たちも一緒にスポーツに親しんでもらえるのではないかと。子育てが忙しい、仕事が忙しいということでついついスポーツができないのだらうと思うので、子どもをダシにして一緒にスポーツに親しむような環境をつくってあげる必要があるのではないかと考えています。

最後に、「東京スポーツビジョン」では、「する、見る、支える」と規定されていますけれども、「見る」ことや「支える」ことの基本は、やはり「する」ことだらうと思って

います。楽しいスポーツを体験することから。見てみて、それから、スポーツを支えようという気持ちになるのではないかと考えています。この機会に、都民の誰もがスポーツに親しむことを、ぜひ運動として進めていきたいと考えております。

以上でございます。

杉山会長 ありがとうございます。

丸山さんとは、私も色々お仕事をさせていただいて、常に、スポーツは楽しい、楽しいスポーツということを以っていろいろ展開されていらっしゃるけれども、今の野外活動というの、スポーツの広さを表すことだと思います。そういったことから、この10年、もう15年ぐらいになるでしょうか、スポーツの一つの単位として、先ほど金委員もおっしゃいましたが、地域といったものが一つの単位として、あるいは、活動の場とシクロズアップされてまいりました。

武井委員と稲葉委員から、この面について、現状あるいは、今それぞれの地域、バックグラウンドの中で、スポーツ、体育、レクリエーションなどでどのような展開が行われ、また、スポーツの新しい東京の方向にどのような形が見えるのか、お話をいただければと思います。

稲葉さん、武井さんの順序でお願いいたします。

武井委員 港区の武井です。私から先にお話しさせていただきます。

先ほど、金委員から、総合型地域スポーツクラブのお話が出ましたが、私のところでも今、まず1カ所、設立の準備を進めています。これは東京都のご協力もいただきながらですが、来月の半ばごろには設立できるのではないかと考えております。

これは、六本木にあります、学校の統合で新しく作った六本木中学をメインに、地域の小中学校の施設を使ってやろうということで、ここが最初にできたというのは、新しく作った校舎ですので、もともとそうした地域開放を意識したつくりといえますか、そういうことを考えていましたので、クラブハウスとして使えるような場所も用意していました。そういうことも含めまして、もちろん、地域の皆さんが支えていただけるということで、設立できるような形になりました。

やはり、先ほどの学校でのクラブ活動がなかなかできにくくなっている状況にもあるというのは、これも少子化の影響の一つかと思いますが、学校が小規模になってくると、どうしても先生数が少なくなってきたり、色々なスポーツの経験がある、あるいは、指導できる先生が絶対数として少なくなっているということもあります。また、チームプレーで

いくと、それなりの数が集まらないとできないなど、いろいろな要因があると思いますけれども。

この総合型地域スポーツクラブの中で、これはもちろん地域の色々な指導能力のある方々のご協力の中でやるわけですが、その中で、例えば子どもでいけば、学校ではできないこと、違う学校の子どもたちと一緒に同じスポーツを楽しんだり、それをまた友達のお父さんやお母さんが指導したり。そういう面での、スポーツの振興と、もう一つは地域のコミュニティづくりの大きなきっかけづくりにもなるのではないかと考えています。

もう一つ。これも地域の皆さんが検討していただく中で、総合型地域スポーツクラブですが、スポーツだけではもったいないではないかということで、総合型地域スポーツ文化クラブと「文化」をつけまして、文化活動にも地域の皆さんと一緒に取り組んでいこうではないかということで、スポーツ文化クラブという形で発足するようになりました。このことは、今、特に都心の中で、コミュニティの希薄化ということが言われていますし、新しく住んでおられる住民の方と、もともと住んでいる住民の方との接点がなかなか見出しにくいということも言われている中で、スポーツあるいは文化を通じたきっかけづくりの大きな役割を果たしてくれるのではないかと期待しております。

それから、運営については会費を取るということで、今、大人が年間2,000円ぐらいを想定しているのでしょうか、ただ、それだけでは運営できないので、当然、区として、自治体として補助していかなければならないのですけれども、こういう面についても、将来的に自主的に長く活動を続けていくためには、財政的な基盤を作ることも大事だと思います。そうした意味では、会員の方の負担と、あるいは、地域の事業所、企業の皆さんにスポンサー的なものになっていただいて、それを支えていただくような仕組みも作っていく必要があるのではないかと考えております。

当区の実情について、ちょっとご紹介させていただきました。

杉山会長 ありがとうございます。

引き続きお願いします。

稲葉委員 小金井市長の稲葉でございます。今日は、東京都市長会から出席をさせていただきます。

昔と違って、今、子どもたちが群れて遊ぶことが街の中で見えないですね。子どもたちは、家の中、塾、学校におりまして、道路で群れて遊ぶ光景が見られません。先ほど、三角ベースの話がありました。私、今62歳ですので、まさに三角ベースで野球をやったので

すが、そういう光景などは全く見られなくなってしまっています。

クラブ活動はどうかというと、先ほど来出ておりますように、指導する先生方が不足しているということで、ただやればいような状況になっているのかなと思っています。やはり学校の施設を使って、子どもたちにきちんとクラブ活動をさせる、スポーツは楽しいということ覚えてもらい、体力をつけるということもあるだろうし、ルールやマナーを教えるということ、上下関係をきちんと、規律を重んずるという大きな役割があると思っております。そういう意味で、ぜひ、クラブ活動の充実、要するに、指導者を育成していかなければならないと思っております。

先ほどから出ているように、超勤とか残業、土曜・日曜に出てくるのは嫌だとか、昔、学校の先生が土日にクラブ活動で出てくるのは当然のような話だったけれども、今はそうはなりにくいのかなと思っていますけど。きちんとした指導者をつくっていただく必要があると思っております。

小金井市は、小金井公園とか野川公園、武蔵野公園など大きな都立公園があるものですから、そこでウォーキングやジョギング、市民の方が頑張っていっぱやいます。先ほど来出ているように、走ったり、ラジオ体操をしたり、歩いたりしている人たちは中高年の人で、20代、30代、40代の方々は余りいっやらないですね。要するに、その人たちは、スポーツの楽しみ、汗をかく楽しみを経験せずに年齢を重ねてしまったのではないかと思っております。

そういう意味で、次の世代の子どもたちに期待をかけていかなければならないだろうと思っています。

それから、オリンピックの誘致ですけれども、ぜひオリンピックを誘致することによって都市基盤の整備を果たしていきたいと思っております。先ほど来、出ておりますように、運動・スポーツを行う場所が道路や遊歩道ということになっていて、果たして今、都内の道路事情がいいかというと、必ずしもそうないないと思っていまして、きちんとした幹線道路を整備することによって、道路を活用した運動ができるようにしていく必要があるだろうと思っています。オリンピックを機に、きちんとした都市基盤の整備を果たして、そして、車が通らないような道路を作りながら、少しでも運動ができるようにしていきたいと思っております。

そういう意味でも、この審議会の「10年後の東京」に大きな期待を持っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

杉山会長 ありがとうございます。

東京だけを取り上げても、スポーツの歴史、体育の歴史、スポーツの現状、体育の現状、学校の状況といったものに実に色々な問題を抱えていて、それを、10年後を目指してどのように、ある方向を打ち出すか、なかなか難事業のような気もしますが、長く教育の場におられ、それこそリーダーシップを発揮されました市川さんに、東京のこれまでの歩みと、これからどういう方向に向かっていくかという辺りにご意見をお持ちでしょうか。

実は、市川さんと僕とは、いつも立場が逆で、市川さんが色々と会合を仕切っていて、僕が意見を言うということでしたので、今日ご指名をするのはなかなか難しいところですが、ひとつよろしく願いいたします。

市川委員 今、会長からすごく難しい話を投げかけられたのですが、その前に、これはぜひ知事がいる間に言っておきたかったのですが、オリンピックの話で、河野副会長さんがいらっしゃるので申し上げたいのですが。

私は今、東京都体育協会に属していますが、魑魅魍魎の世界だと知事さんはそうおっしゃいましたが、そういう部分もかなりあるかなとは思っています。

それはそれとしまして、オリンピックは、上部、下部という言い方はいけないのでしょうか、上のほうはきれいな運動を進めていらっしゃる。僕は、これは非常に大事なことだろうと思います。アピールするにしろ、何にしろ。だけど、そういうことのせいかどうか分かりませんが、地べたに足をつけた、そういう運動がイマイチというか、全くと言ってもいいほど弱いのではないかという気がしています。

一例だけ申し上げますと、今年、9月の終わりから10月に秋田で国体がありました。そのときに、まずそのことを知事に申し上げたかったですけれども、バッチがありますね、河野副会長さんがつけています。議員の先生もつけていらっしゃる方がいらっしゃいます。これを大々的に配ったらどうだと僕なんかは思うんですけれども、個数ができていなくて配れませんと。それから、後ろにオリンピックののぼり旗がありますが、こんなものを50本か100本ずらっと並べなければ、点々とあっても何の意味もない。何の意味もないといったら言い過ぎかもしれませんが。こういうものは、目立つようにしないと駄目だと思います。

そういう、言葉は悪いのですが、どぶ板的な活動がかなり弱すぎるのではないかと思っています。

実は、明日から関東ブロックの体協の会議がありまして、8県ありますから、8県の体

協の代表の方に、これをぜひ配って付けてよと言いたいのですけれども、そのバッヂがない。やはり、どぶ板といいますか、そういうことも考えていただかないといけないのではないか。

ちなみに、知事さんがいたら申し上げたかったというのは、知事はバッヂを付けていらっしゃるんですね。実は、私も付けていないんですけれども、付けているとみんな取られてしまうんです。会議に行くと。それ、オリンピックの招致バッヂでしょう、いいねと。じゃ、あげましょうかと、取られてしまうわけです。ですから、そういう意味では人気があるので、ぜひそういうことにも配慮していただきたいし、知事には、ダンディだからつけないとおっしゃれば、それは個人の好みですからやむを得ないかもしれませんが、やはり付けていただきたいなと、僕などは現場にいるからそういう風に思います。

このスポーツ振興計画、先ほど、これはたしか会長さんの発言だったと思いますが、どれを見ても金太郎飴みたいになってしまうという話があったかと思います。それはそうなんです、きっと。上手な言葉で格好よく言おうと思えばそうになってしまう。僕は、そういう計画をなんぼつくっても意味がないと思います。一番基本になる、これなら東京都もお金を出せるでしょう、協力できるでしょう、各団体だって、学校だって、これならできるでしょうというものを、どうしてきちんと作っていけないのかなという気がしています。

皆さんの意見をさっきからずっと聞いていて、色々ないい意見をおっしゃるなど。僕なんかはとても足元にも及ばないと思うのですが、それを実行するとなると、一体どうやって実行するのかということになって、それは、ひるがえって行政のほうにボールを投げ返すことになるのだらうと思います。投げ返された行政だって、予算の問題あり、人の問題ありみたいなことで、何となく実行できない。残るのは言葉だけで、どなたかおっしゃっていましたが、今もそれは有効でしょうけど、東京都の前身というか、うちの会議は、スポーツを「見る、する、支える」という立場から、何かそういう風にまとめられないものかという答申が出たことがあります。確かに、そういうあれに従って色々計画を立てられていますが、やはりお金、そう言ったってな、という部分がかなりありまして、実行がきちんとできない。実行ができなければ、計画を立てても、少し乱暴な言い方ですが、意味がないのではないかと思います。

ですから、ぜひ、振興計画を作るからには、ここまでは絶対に行政として責任を持ってできるという形で取りまとめていただきたいと思います。

大変申し訳ない言い方を幾つかしましたけれども、ぜひそういうことで、会長には特段の努力をお願い申し上げます。

杉山会長 ありがとうございます。確かに、ここで多くの意見、優れた意見、すばらしい意見が出て、それが単なる活字でまとめられ、議事録でまとめられ、レポートに仕上がるだけでは何の意味もないと思います。その点につきましては、毎回、市川さんが今おっしゃったようなことを必ず言って終わるという形にしていくことが一番いいのではないかと思います。

今、行政というお話が出ましたが、お忙しい都政を担っていらっしゃる3人の委員の方にもご参加していただいている審議会です。おひとつずつ、名簿順で恐縮ですが、小沢さん、木内良明さん、山田さん、これまでの議論など、あるいは、都のこれからのスポーツといったものについてご意見を賜ればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

小沢委員 小沢です。今回初めてこの審議会に委員として参加させていただいております。

まずオリンピックですけれども、私がちょうど10歳で、小学校4年生のときに東京で開かれまして、今でも鮮明に覚えているのが、国立競技場の上にブルーインパルスが五輪の輪を描いた。この場面を、私は小学校の校庭から運良く見ることができまして、非常に大きな感動を覚えた記憶があります。今の子どもたちに、ぜひ、オリンピックを東京で開催して、この感動を今の子どもたちにも味わってもらいたいという思いで、招致活動に、微力ながら、今、励んでいるところです。

先ほど来、諸先輩方からいろいろな意見がありましたし、残りの時間もあまりないところですので、私の考え方を簡単に述べさせていただきます。

スポーツというのは、子どもの遊びから始まって、オリンピック選手、トップアスリートまで、非常に幅広く、一概に語ることはできないかと思いますが、その根底は、幼少のころからの体力づくりです。私の場合は、遊び＝運動、遊びが体力の向上につながっていました。私は、中学、高校と野球をやってきたわけですが、それに没頭したためだと思いますが、悪い道にも入らずに進んだということも言えるかと思います。

今回の資料では、スポーツに期待する色々な効果という中で、青少年の健全育成が約30%ですが、スポーツというのは、体だけではなくて、心、精神も鍛えていくものだと思いますので、色々な角度で考えていかなければいけないかと思います。

また、これから地域でのスポーツが本当に重要になるかと思います。団塊の世代の、

色々な技術、経験がある方々が社会にどんどん出てこられますので、そういった方たちの経験・能力を生かした、スポーツの指導者の養成が必要ではないかと思います。我々議会の方では、色々なハード面、施設、こういったものも充実させていかなければならないと思いますけれども、まず第一に、スポーツの地域での指導者、これをいかに養成していくかということに力を入れていきたいと思っております。

山崎泰広委員からもお話がありましたけれども、障害者のスポーツに関してですが、障害者スポーツというのは、正直言って、私よりハビリというイメージがありました。つい先日、私は地元で、シッティングバレーという、次のパラリンピック、北京に行く日本の代表の練習を見させていただきました。基本的には、バレーボールと同じように、非常に競技力の高い練習をされていましたので、そうした、障害者の方たちのスポーツに関して、やはりトップの競技を目指す方々のスポーツというものをもう少し考えていってはどうかと考えております。

以上です。

杉山会長 ありがとうございます。

よろしく願いいたします。

山田委員 私は、西東京市選出自由民主党所属の都議会議員の山田でございます。

今回初めてこのスポーツ審議会に参加させていただき、また、皆様から貴重なご意見をお聞かせいただきまして、ありがとうございました。私も、一都民あるいはスポーツ愛好者の立場からいろいろ発言をさせていただきたいと思っております。

地元都議会議員として、いろいろなスポーツ団体の方から、ご案内をいただき、参加することがございます。皆様からお話を聞くと、一様に、スポーツはやりたい盛りだけれども、その場所や施設がないということを言われます。では、具体的にどういう場所があるのかと言えば、公園の一部を利用したり、空いた運動場を色々なスポーツ関係者の方が、半年・一年前から日程を決めて場所の確保をして使っている現状の中で、やはりスポーツができる施設といえますか、そういう環境づくりは大事な事だと思っております。

東京都の行政に対しては、そういうことで色々とスポーツ団体が要求しても、現場の公園では管理ということの中で、希望を受け入れられないというなかなか難しいことありますが、そういう点についても、やはり都民の立場として、行政にも積極的に協力していただけるような、環境づくりは大事だと思います。

今、スポーツに対する環境は追い風だと思います。知事が、「10年後の東京」というこ

との中に、スポーツを大事な柱として位置づけております。東京オリンピックも、招致を目標に色々な施策を展開しておりますし、それに見合う予算を、行政側としても用意しているということもありますから、ぜひこういう機会を通じて、スポーツ団体の皆様、スポーツに対する取り組みを積極的に行政にぶち当てていただければと思います。

実は、今年の2月に行われました東京マラソンで10キロを走りました。私は地元でラジオ体操に参加していますが、ふだんは陸上をやったことがありませんでした。しかし都議会の仲間の中で、せっかく東京マラソンをやるのだから、誰か出ようかという話の中で、簡単に私やりましょうと名乗りを上げ参加しました。

参加してみて、マラソンというものが市民の中に本当に定着していることを実感しました。テレビで見るとは違い大変ハードなマラソンでしたけれども、やはり市民マラソンに参加してみると、老若男女を問わず幅広く皆様がマラソンを楽しんでいるという姿を、ともに私も参加して感じました。

そういうことを通じて、やはり機会を作ることで市民の皆様はそのスポーツの楽しさが味わえる。それがまた広がっていくということの中に、行政としてもやるべきところがたくさんあると感じております。

行政でも、健康的なまちづくり、あるいは、今、文化・スポーツということが大変大事な、都民、市民が要求しているといいますが、望んでいることでもありますので、ぜひそういう点についてもしっかりと取り組んでいかなければいけないと思っております。

多摩国体が平成25年に予定されている中で、それに合わせて都市基盤の整備もありますし、あるいは、スポーツ団体の皆様は、それを契機に、ぜひ、地域の中で、スポーツに対する理解といいますが、関心、興味を増やそうと色々取り組んでいらっしゃいますので、これからが東京にとっても、私は多摩ですけれども、三多摩にとっても大事な10年になるのかなと感じております。

以上です。

杉山会長 ありがとうございました。

木内(良)委員 しんがりのグループですので、難しいところであります。都議会から3人の枠で、私は志願兵で本審議会の委員に参加させていただきました。

さっき、木内秀樹委員もございましたが、ワールドカップのラグビーがやっと終わって、夜更かしをしないで済むようになりました。スポーツ議論というものは色々な角度から用意してまいりましたが、それぞれの委員の先生方から出ましたので、重複は一切避けて、

ポイントを絞って申し上げたいと思います。

まず、今日の会議の印象ですが、杉山会長の見事な采配でこれだけ進んでまいりましたことは、効果的な会合であるの一つと思います。

もう一つ。今日私が考えてまいりまして、申し上げるべきかどうかと。スポーツ振興審議会ということですから、このテーマになじむのかどうかという、実は色々な思いを持ってまいりましたけれども、山崎浩子委員と、金子正子委員のお話を聞いて、意を強くいたしました。

すなわち、スポーツをいかに振興させるかという議論が、ともすれば特化された競技スポーツであったり、世に喧伝されるような顕在化したスポーツをどうするかとか、あるいは、指導者の層をどう厚くするかとか、施設がどうかとか、こういう、いわゆる既成概念的な議論に終始しがちですけれども、スポーツという概念をさらに広くとらえて、例えば、歩くということ、ラジオ体操という言及もありましたけれども、私は、都民1,260万人の方々が、いみじくも、さっきどなたか言っておられた、一人も漏れなく、都民の誰もが一つのスポーツに親しめる社会、こういうご意見がございましたが、これを目指すべきであろう。これが本当のスポーツ都市東京であろうと。そのために、さっき言った、歩く、都市構造の中での習慣。もう一つは、ラジオ体操、人のふんどしで相撲をとるわけですけれども、これも宣揚しながら、街の誰もが参加できるスポーツということでこれをとらえていいのではないだろうか。特に河川の整備も行われてきて、遊歩道もある、こういったところに、地方自治体の区市町村あるいは地域町会、団地の自治会等連携しながら、歩き方教室の理想的な、あるいは、あるべき歩き方の教室などを、点をつなぐようにして、都内全域で行っていく。あるいは、ラジオ体操に家族ぐるみで参加しようというような、そういう地域ぐるみの運動を、東京都の生活文化スポーツ局が音頭をとって、渡辺局長、細井スポーツ振興部長も、ぜひ進めていただきたいと思いますのは、私はスポーツの概念をそこまで広げていいと思いますし、今日の議論が次の会合に具体的にどう反映されるかが重要だと思いますので、まずそのことを訴えたいと思います。

特に、スポーツに専門的に携わっておられる方がA群グループ、スポーツに関心があるのが好きだというか、応援する方は、Bグループ、Cグループとありますけれども、Dグループ、Eグループの方々、意識はあるけれども、実際に一步を踏み出せない方々、こういう現場でスポーツへの門戸をどんどん東京都が、行政の助力、尽力によって、都民のスポーツの場を開いていくと。これはぜひ、行政の場で検討していただければと思いま

した。

ほかにも何点かありますけれども、以上とさせていただきます。

杉山会長 ありがとうございます。大体まとめていただいたような気がいたします。

最後は、やはりジャーナリストということで、古谷さんに少々辛口のまとめと、今、木内（良）委員がおっしゃったA群からE群まで、ほとんどのことについて見識のおありの古谷さんにご意見を賜って終わりたいと思います。

古谷さん、お願いします。

古谷委員 そんなにうまく話せないと思いますが。

今、スポーツ事業部というところにいまして、サッカーで言えば、少年サッカーから高校サッカー、CWC、クラブワールドカップまで、野球であると、中学生の野球から、プロ野球の巨資の興行までということで、スポーツの運営の現場に携わっておりますが、私はまだなってから2年で、本当に素人のようなものです。2年前までスポーツ記者をしていました。1992年のアルベールビル冬季五輪が最初のオリンピック取材で、その後、96年がアトランタ、2000年がシドニー、2004年のアテネまで、オリンピック招致も含めて、何度かオリンピックを取材させていただきました。

その中で、東京オリンピック招致と言われたときに、一つのシーンが思い出されました。ちょうど10年前の1997年に、アテネで陸上の世界選手権がありました。これは97年の夏です。その年は、ちょうど、2004年のオリンピック開催都市を決めるIOC総会がある年でした。その時、私もアテネの世界陸上に取材に行きまして、空港に着いた途端に、訳も分からず、アテネのボランティアの皆さんに取り囲まれました。最初はどうされるのだろうと思ったのですけれども、実は、お荷物を持ちましょう、バスに乗りましょう、アクレディセーターまで一緒に行きましょうと、私のつたない英語でもよく聞いていただいて、連れていかれるような形で、世界陸上のアクレディセーターまで連れていかれました。

最初はすごくぎこちない感じがしたのですけれども、だんだんと付き合っているうちに、ボランティアの人たちの熱意といいますか、オリンピックに来てほしい、オリンピックを呼ぶんだという、そういう気持ちが伝わってきたことを思い出しました。先ほど、中川さんが、スポーツに関わるというアプローチが必要だとおっしゃったことをお聞きして、そのシーンを思い出しました。

やはり、東京にオリンピックを呼ぶということは、いかに多くの方が、そういう精神をお持ちになる、引き出される、オリンピックに熱意を持つというような、いかに多くの方

がそういう関わり方をしてくれるかということが非常に大事なのだと思いました。

それと対照的に、前年の96年のアトランタオリンピックの時にも、色々なボランティアの人と関わったのですが、アメリカですから色々なことが整備されていると思われがちですが、ボランティアの人はどうだったかというと、現場で本当にぎくしゃくして、会場に行くのもなかなか行けない、プレスとも常に衝突があったり、バスの運転手が、メイン会場に行く道筋を知らない。我々が50人くらい乗ったバスが、1時間かかっても競技場に着かない。これはどうなっているのだろうと。

ですから、オリンピックに関わるには、招致の段階、実行の段階、ものすごく莫大な数の人たちが関わることになると思いますけれども、これはやはり招致の段階から、みんながそういうマインドを持つ。そのマインドを持つにはどうすればいいか。マインドを醸成していくにはどうすればいいかということがすごく大切ではないかと思います。

一つには、みんな、スポーツに関して興味を持って、やる楽しみや見る楽しみ、さまざまなことを経験しながら、そこからスポーツマインドを醸成して行って、みんながスポーツに関わることを楽しんでもらえることが大事ではないかと思います。

それともう一つ。現場でのスポーツ、するスポーツ、地域・学校のスポーツの話が出ましたけれども、その中でキーワードの一つは、やはり緑の芝生だと思います。芝生があることによって、けがをしないでできる、痛い思いをしないでプレーができるというのは、子どもたちにとってすごく嬉しいことだと思います。

少年サッカーが、3年ぐらい前から、福島のジェイビレッジというところで予選を行うのですが、そこで天然の芝生で子どもたちがやると、ものすごく生き生きとしてプレーしてくれます。やはり、芝生は、日本のスポーツにとって一つの大きなキーワードではないかと思っております。

以上です。

杉山会長 ありがとうございました。

山崎（浩）さん、岡野さん、河野さんのお話からスタートしまして、多くの方から、ランドマークの問題ができ、芝生ができ、それから、木内（良）さんから、スポーツの概念を広げようと。すべてこの10年先を見据えた東京のスポーツ振興基本計画は、今日で、あるテーマが出そろったような気がします。次回以降は、そのテーマをなるべく整理して、多くの方々に今日のような発表というか、ご発言ではなく、意見の交換に持ち込めたら思っておりますので、ご協力いただきたいと思います。

それでは、ここまでを第1回の会議といたしまして、残る時間、事務局にお返ししたいと思います。

細井スポーツ振興部長 ありがとうございました。

お忙しい中、貴重なご意見を頂戴いたしまして、本当にありがとうございました。本日いただきましたご意見をもとに、事務局におきまして課題を整理の上、新しいスポーツ振興基本計画の策定に向けて検討を進めてまいります。

なお、次回の審議会は、来年の2月ないし3月の年度末を予定しております。またご連絡させていただきます。

これをもちまして、第1回の東京都スポーツ振興審議会を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

午後4時25分閉会